

111

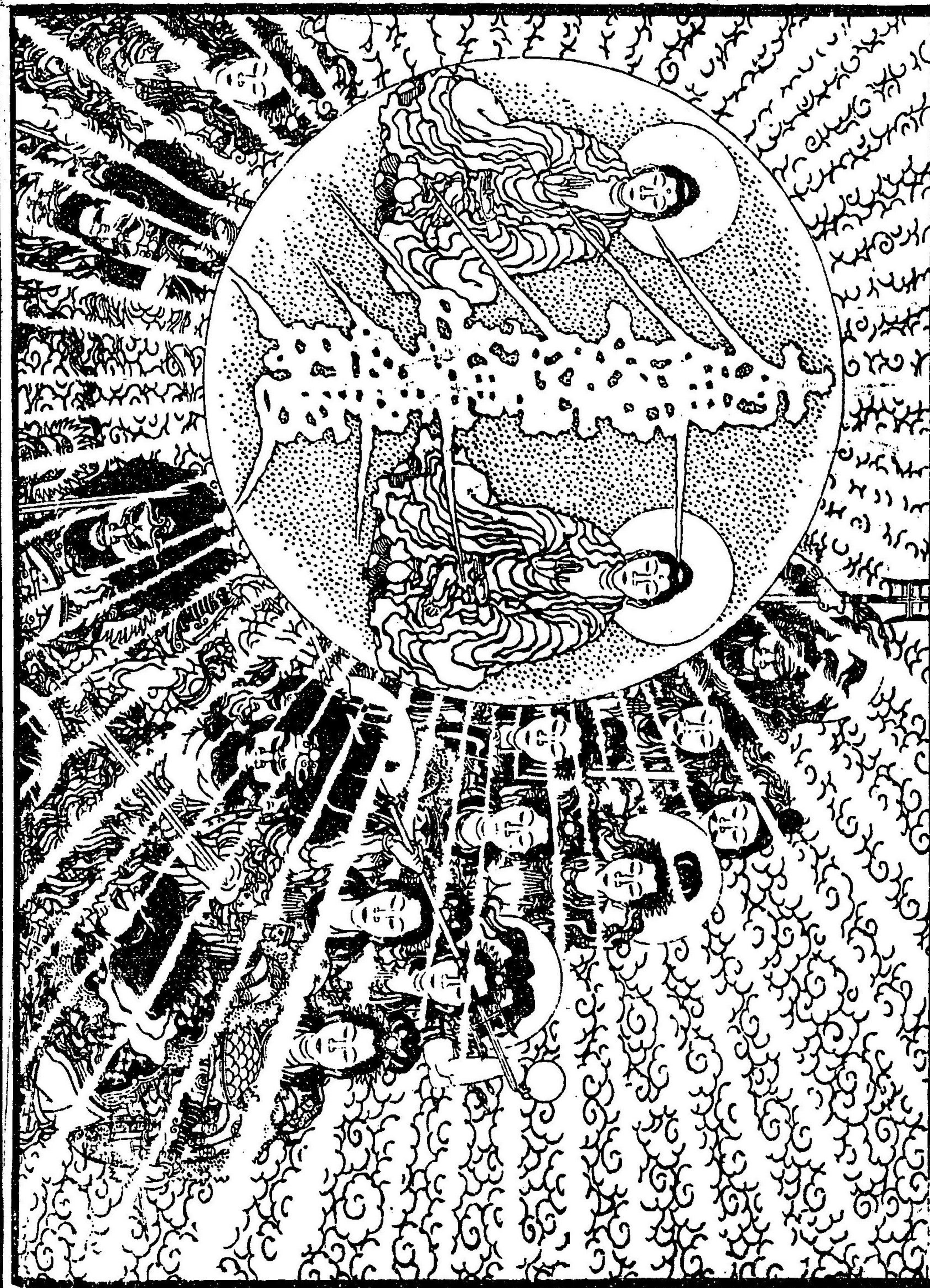
34

館書圖京東

六	三		一		
冊	四	架	函	類	門

日蓮上人一代圖會

貳



五向祖
 雲中
 祭三十番
 字
 實
 以

一道清淨。その教の唯一佛乘あり。嗚呼一のなる偉ある。太租天賦自皇大神
宮の久遠。實自世より。中地無邊。その按一あり。懐ふまぬる。度成夏四月廿八日。移
勢小。猶て宗廟を拜し奉つ。つら及び三三の示現と。蒙る。かまづ。ことと。良辰と。を
雇。そのその日。ゆづきぬ。清淨の徳。佛房。わて。別。不道場。と。様。入ら。清淨。潔。白
あて。一七日。の。新。小。移。り。身。一。念。不。初。不。初。預。入。その。満。る。日。小。あ。び。中。地。の。妙。境
恍惚。と。て。法。界。を。徹。十。方。通。同。せ。る。こと。と。言。へ。南。無。妙。法。蓮。華。經。の。七。字。の。赫。奕。入。る。光
明。と。放。ち。中。央。不。現。下。り。その。右。右。の。釋。迦。世。尊。の。多。寶。如。來。佛。の。ま。ま。釋。迦。佛。來。の。懷
士。の。上。の。妙。の。四。菩。薩。あり。この。眷。屬。の。文。殊。師。利。鉢。勒。等。坐。小。居。り。迹。化。地。方
の。該。菩。薩。の。入。へ。王。侯。貴。人。の。ち。の。あ。あ。氏。諸。侯。を。て。恭。く。殿。上。と。を。む。む。と。く。林。九。天。帝。釋
は。大。天。王。二十。番。神。夜。叉。羅。刹。の。衛。護。と。て。伍。隊。と。す。す。は。実。の。神。力。品。の。說。相。儼。然。と
虚空。中。小。現。は。ま。り。程。る。東。方。白。と。後。に。旭。日。輝。と。界。と。死。光。明。自。然。七。字。の
勢。あり。高。祖。奇。異。の。よ。ひ。と。り。ま。て。然。回。轉。拜。の。ひ。合。掌。す。と。大。音。を。南。無。

妙法蓮華經と唱へ多し。こと此宗門を頼むと唱ふるの極楽あり。かくて十編
なる。唱へ。の。ひ。安。祥。と。て。坐。小。能。の。坐。小。と。採。か。の。七。字。の。勢。と。書。し。の。ひ
こと。は。月。廿。八。日。と。と。世。本。妙。法。蓮。華。經。三。十。八。日。と。か。て。其。日。室。内。と。出。の。ひ。就。多。年。の。勤。行。の
因。て。上。善。提。の。因。と。得。り。傍。り。衆。小。ふ。ん。時。刻。と。後。に。衆。合。を。の。満。足。と。ん
と。觸。の。入。縁。と。道。徳。の。入。と。あ。の。究。め。と。尊。と。と。ん。と。一。山。の。妙。門。の。ひ。及。ん
坐。修。入。る。俗。輩。の。吾。の。く。と。集。合。未。る。中。の。地。頭。東。條。左。令。吾。平。景。依。の。信。未。の
俗。輩。の。上。坐。未。在。り。今。や。違。と。耳。と。教。て。所。說。の。小。と。附。う。ち。後。の。下。下。祖。の。ひ。か
と。願。と。大。衆。の。列。位。珍。き。と。其。甲。多。年。の。妙。行。小。因。の。妙。妙。の。大。法。と。三。字。と。各。と。指。た
ら。その。大。法。の。虚。空。會。上。七。寶。塔。中。別。説。有。屬。事。の。一。念。二十。年。來。の。秘。密。を。南。無。妙。法。蓮
華。經。の。の。妙。法。の。大。目。如。來。阿。彌。陀。佛。法。華。經。の。妙。法。の。世。尊。の。の。其。親。と。因。ら。か
故。を。賢。者。の。位。地。小。處。を。況。や。文。殊。師。利。鉢。勒。親。者。某。王。某。の。迹。化。の。菩。薩。の。の。法。と。説
ぶ。が。故。と。小。凡。夫。小。抄。の。の。折。後。の。五。百。歳。一。切。衆。生。と。及。せ。ん。の。爲。め。の。の。なる。

天魔甚ま亡く洋國賊のく邪に放逸する今世の金言を引て定ふ小僧
明なるかめいと憚る所あり流めり

附くは天魔波旬のこえり釋書と按る小皇大神宮の條下小いらく云於
時神宮在天上下見海底有大日如来印文神宮怪之下鉾搜印文
其鉾滴如露逆散於是魔王波旬遙見曰此滴露成地来世必興佛
法我欲壞此乃自天而降神宮逆波旬語曰此地我之有也我忌三
寶不敢崇敬願大天莫慮也波旬便還依茲神宮内歸佛未外拒釋
衆蓋信于波旬也云々云々大魔王佛法と破滅せんと欲する云々
世用の辨るほど固く據てととと緑の重きお示しのこ

佛のこふ集會なるまよふの縋素未留有の況とてて入ふ後とて渠のかるくを狂れせり
争ふとの給りらんと逢ふ返り散る地以平果信の從来淨土門と添く信ふ念併こ
時のはりりぐととと因より大お怒り渠の從へ度後せりともかゝる悪まどとのまらふ

阿鼻獄の隋さぐ速なる念佛と破れを悪まらふり己が首の池に墮る執り軍ととと
知るさん憎らま佛と刀の欄をもと掛し候ま時その怨はの悟けまど渠就お
こゑと著せととと斬へり得る院をた若小禪らひて衣と腹せ作作とる斬
あつとありひつせお道若ぐやお到り如世のものとりの入道若めとととまらふいと不審
いありひるま少年より汝くませむ連長まらひ口管おととと階階と速おいと逐
んとしお決らぬ形てる祖の果信が怒りお觸まてとと逐ひ是を小神吟も今も更お
是と事とせまどととまの佛の法の為小懸と捨つ我まより此命と法華經おまね
ままぶと教の敵おらんと縁て此の言え悟るの何ぞその敵とまどとはと辨むこととまら
けん今この寺と逐るる遠離た塔寺の經文うと自若くとまらふこふ洋頭屠義
津房の言祖が着高織るおよりのこまらめて候めりたく志操の堅実ある刀杖の發
も争おまのん然れども此を今うととと後年の栄もあま果信師の階階と空を

遠くおぼしき心中の憤怒いまだ解ゆるは略と遠くおぼせんと命の計らふは我に降く
 一とて懐せんとせしむる密の回道と取り。日にお條華房の郷も蓮房も匿く
 祖もより後念も赴くとまふ父母の家も適宜。如此のよと若別離の情と懐く
 父母安て別と惜と吾情も年をて再念の期に計り難。折もごま操と親する
 密のより如く吾も多。實の大法のまもる吾もまもる宗を改め。今より法華經も
 皈せん。とま祖次で飲びのひ久遠世も本化菩薩と勸導奉り。妙法と奉げたて父
 母の項も如く以受持の文と唱ふる。と漏父母番と極くことと謝辭。喜一とま喜する
 る。今吾もの大徳も困て。更不成佛の程と得る。より我師あり我の身もあつ。自問と
 蓮との福もてふと度。この微妙の大法と受ると。實も不亦。妙法の佛縁もま法
 華とまて父の妙日母の妙蓮と仰んとある。と祖誦確報。奉り。ひ英ある。父母の
 徳も。靈山會上と。世も本化の徳と頌。日月の光明の照法の函具と除
 く。か。と宣。誦勸もま。本化の徳。蓮華の水も在。地より涌出ると。入。親

の法歸測らる。暗ふとの程。ま合ぬ。法華經と信。も。蓮上のめ。修。の。蓮
 下。た。父母の大徳。と。父母の法華と取り。今より日蓮とま。い。と。ま。より。辨。を
 故。を。出。多。人。が。父母も。祝。を。送。ら。せ。り。
 按。る。お。是。より。密。の。華。房。の。青。蓮。房。も。在。り。郷。の。地。以。り。念。佛。者。も。故。お
 一。年。の。鉢。陀。堂。と。蓮。管。一。と。祖。と。て。堂。供。養。の。存。所。と。ま。と。ま。む。これ。外。の
 宗。教。と。加。入。の。善。心。と。抱。く。の。も。祖。の。と。ま。と。ま。一。点。も。り。も。辨。を。
 父。も。既。お。か。の。堂。も。到。り。の。ひ。鉢。陀。の。と。ま。安。の。化。主。教。の。此。ま。の。化。主。の。聖
 縁。の。鉢。陀。も。佛。も。有。縁。の。釋。迦。と。捨。る。故。も。殿。堂。と。送。ま。鉢。陀。と。ま。ま。法
 と。の。か。い。の。の。か。あ。は。阿。耨。鞞。小。隨。一。と。ま。お。お。祖。教。怒。り。お。お。害。を。加。入。と
 る。は。適。放。ふ。者。あり。て。腹。も。の。も。と。得。る
 今。の。載。せ。ば。ま。ま。祖。の。父母。は。華。房。も。飯。一。法。華。の。と。且。ま。祖。と。ま。より。日。蓮。と

更めあて佛祖統紀の外不見あり。現も他本脱漏あり。

又二一本ありて。言祖師院堂を難と避け。是より上徳を全すの觀音堂に

到り一宿一のひん妙種續備あり。且一宿と稱し一宿あり。流のあわれに

とて今日を去と成りあり。かくて同本深本の願を悉く成す。

五部時光のあ人觀音の曼荼と被り。聖妙波処に至りて。祖と入る。亦現成

志に馬の誘せ奉り。婦老と竹菴と管。二十日の親法と傳ふ。今深本の妙光寺

とてこのつらへ

第八 他宗の非と奉と破と下藤以下相越とある事

祖のそとより強念小者あり。名紙の松葉谷小草菴と稱ひ。普くこ小僧の十時

華嚴宗の明慧とつらの撰邪輪三卷と造り。専ら法然が念佛集と折く。その筆力

勇猛あり。法然と指して法滅の浪中佛法の無故。これれ大戒とあり。祖と

圓のひん。青あり。今の世も。かゝる人の。然き。この化未の本門の大衆

知ん。とて六十歩百歩も入る。吾將小一針と弄す。その病根と刺す。

と筆と挿て作書一の。とて守護國宗論とつ

按る小犯奉釋小守護國宗論と著し。入る。元元元未。祖二十八卷の内と

その。且華嚴天台の字傳あり。書と著し。撰擇集と駁すとあり。明慧

の化と定つありと云

かくて釋宗小修。あり。異書多く積り。祖と祖と圓。多の教月小と歸り。入

依の世間と觀する。ふ上代の。且今舎。中古大同弘仁の二上皇。空

海少邪法と著て。其後。の瑞と啓。保元上皇。転。小出つて。天个。乳。ま。より。衆

王道と書きて。在。小。霸。通。小。走。り。今。強。念。小。元。帥。と。重。と。弘。夷。大。和。軍。の。權。を。柄

と。その。實。の。剛。元。帥。北。條。氏。の。政。方。あり。と。是。白。法。深。波。と。是。法。の。親。だ。と。佛。法。と。法。と

等。と。その。家。へ。の。新。必。一。あり。と。未。達。と。と。の。時。を。識。と。後。五

百歲。神。皇。國。自。法。深。波。と。現。の。ひ。た。上。り。善。護。出。現。の。内。小。衆。あり。今。強。念。と

米少
高
備



日本書紀卷之三十一

愛深明王

日輪中出現



不動明王
天照皇太神
月輪中出現



54

ふの首領大書を供せし。後ふの首領と宗廟小納むる小形之圖の山津ゆふ
罪と云ふ。須池上在流の太史宗伸在流の義宗は條と宗方流門類基連
士太郎若春等時と来ると教化と票の。一内言祖下孫小徒多ひ帰らんとして同
一小師鹿浦小使能と索む所小富本五郎胤継の着官の邑をさるり。孫金の連
宿小あつり。まより船小乗けるが折入言祖夜能あつり。の浦と呻吟の胤継連
小こととて入て船中殊小困服あり。かの信と呼入ると云教ふるると云ひ徒老を
志て言祖と折く。言祖大お教びひて。船中不到り。胤小繼と解小あつり。
五郎胤継言祖小對ひは房の何の家とて同ふも祖對へて多たりのいと宗のと定め
といふ胤継少くも改改。日來孫金小日蓮といふ奇信出て法宗と折伏し。法華
の類と唱ふる。由二言と云ふ。同ふも祖對へて。いと實入胤継をさるり。
後宗河と同と云ふ。祖の徒宗とて宗の袖と拵合せ。是佛法の舟をり。法と
柱と宗の守護。胤及順次法教と標ひて一切衆生と救ふ。おあつり。然るおあつり。

世に信と呼ぶ。未の成世の世のまを。おあつり。おあつり。の宗祖小流とて。時
機相度のおへる。故小却て。おあつり。おあつり。おあつり。おあつり。
日蓮宗とて。おあつり。おあつり。おあつり。おあつり。おあつり。
徒と廢小至らば。還て佛教の汚名と彼り。且ね信と嘲らる。その以何小とる。ま
念佛と回答は箇の邪法と稱さる。その釋の箇様と。と釋香水の流る。ま
理とて。號の。五郎胤継は終り。おあつり。おあつり。おあつり。おあつり。
悉く隨着せり。と宗教とま。おあつり。おあつり。おあつり。おあつり。
情着官の邑小住に。富本胤継といふ。おあつり。おあつり。おあつり。おあつり。
他日彼処と違り。おあつり。おあつり。おあつり。おあつり。おあつり。
殺と別ちらる。おあつり。おあつり。おあつり。おあつり。おあつり。
ある祖機。おあつり。おあつり。おあつり。おあつり。おあつり。
の賜あり。おあつり。おあつり。おあつり。おあつり。おあつり。

の行敏等その他碩学の智識と名せし僧等一箇年耳を敷て以て其の悟下とて
歎矣十字劫の逆聲盈溢を今この女信を失ひてんは後必大害ありんと當
と唯と眼と睥とを終不殺戮と加んとりる祖の温良恭實とて遊り更不怖
るまゝの實不怖るまゝのゆゑなりと地を遠るる不ありとて一日の三教をくべし
て年の中も唐元元丙辰ありと祖は宋二十六年ありとせし人 連長十月
まろく勇極あり法氏相親ひ相呼ぶ中不半と是不和する者ありまゝは不傾く
のありまゝは後する去降る者あり。妻の信を失ひてんは後必大害ありと當
或ひまゝ不怖ると見ふ背に三府内大不怖とて工友吉隆社を義宗
池上宗仲四條教基進士大郎若春らりて法華の是るるともつて念佛と捨れ
願と持し本化戴髮の才と秘と 我教の才と秘と 奮つて死命と願と外護
の力を振ひたり。そのゆゑ祖怒まて得てとてと奴僕とあり。この年二月廿九日
雷電驟多く洪水あり。六月七日まゝ大なる勝島の社に初を是惟りありとて

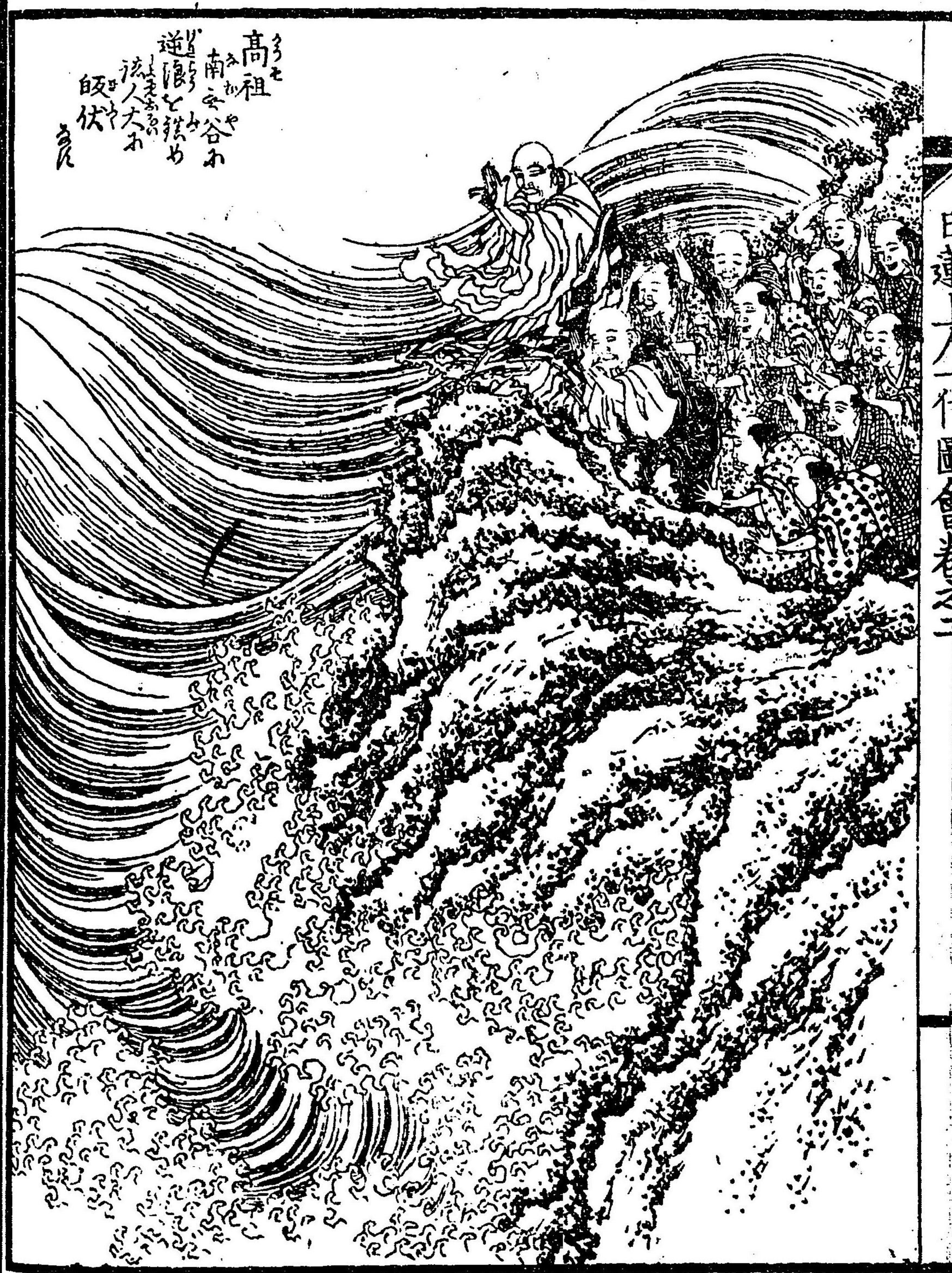
けり。法入忍怖を懐く所。十月八日ありて大元帥頼朝十八歳ありて其の
按る小頼朝兼進佛祖統紀の如く我の然とて頼朝のまゝなり。連長四年
職を解し。帰洛あり。もつて宗室の親王凌時後念の將軍なり。まゝなり。大元帥
おて今以後念ふ干らば是の終るらん

その翌正嘉元丁巳の組は廿二の 康元三月 元八んちん
地震初一日と終るも猶止まらば夏ありてありは後二箇年旱魃せり。とて終るも
時風ぬれあり。五月十八日ありの所大地震ありて民屋と壊れ。陸陽師の部時香と
あて占りあり。八月朔月のまゝ大地震二十三日のまゝ地震。神軸も推
けんといふ神社佛圖を不破壊。山嶽の崩れと大地震とてそのまゝまゝ大震備あり。九月
日月もまゝ地震あり。まゝなり。十月十日小動止む。かく天地のまゝ不遭て稲穀更不登りたり。と
たよ中一同飢饉とて 稲穀の登らざるを加へり。は氏食物を失ひ飢饉不遇。とて傳ふ日
連法師が毒殺とて。邪と本高ふ天の威ありとて。とて悟と刀杖と企ての勝教を

連法師が毒殺とて。邪と本高ふ天の威ありとて。とて悟と刀杖と企ての勝教を
たよ中一同飢饉とて 稲穀の登らざるを加へり。は氏食物を失ひ飢饉不遇。とて傳ふ日
日月もまゝ地震あり。まゝなり。十月十日小動止む。かく天地のまゝ不遭て稲穀更不登りたり。と
けんといふ神社佛圖を不破壊。山嶽の崩れと大地震とてそのまゝまゝ大震備あり。九月
あて占りあり。八月朔月のまゝ大地震二十三日のまゝ地震。神軸も推
時風ぬれあり。五月十八日ありの所大地震ありて民屋と壊れ。陸陽師の部時香と
その翌正嘉元丁巳の組は廿二の 康元三月 元八んちん
地震初一日と終るも猶止まらば夏ありてありは後二箇年旱魃せり。とて終るも
けり。法入忍怖を懐く所。十月八日ありて大元帥頼朝十八歳ありて其の
按る小頼朝兼進佛祖統紀の如く我の然とて頼朝のまゝなり。連長四年
職を解し。帰洛あり。もつて宗室の親王凌時後念の將軍なり。まゝなり。大元帥
おて今以後念ふ干らば是の終るらん

と計り或ひの將軍執権の後之の女人の女性お祈へてとて熱りんと縁りたりともの
おつたてたが故おそれの怖れ申。まことに余は、この世の縁りは、天竺大塔の
ゆゑ佛法の戒めあり早く邪義を退けよとて、此の世に佛を大に尊ぶらんことを、佛
のひ自若とて更にお勧め。千手千眼觀世音菩薩、新羅の邪義の後、戒めをば本井の
那実長ひ性来認教しして、まこととて。且その志佛来あり。在る義宗の縁あり
軍が、愛の縁余お承前せり。この世に在るに、お救國會合して、世に禪を尋べ
佛法の法め及ぶ在る義宗のひらり。抑佛法の法め、唯一乗の法華經の
已て、お承り。佛の法華の即天有る。今人の天台の修を佛人偏お佛を、けりりの
あて佛の法華の在り。この世に在るに、お承り。佛の法華の即天有る。今人の天台の修を佛人偏お佛を、けりりの
宗野へて遠くお承り。お承り。佛の法華の即天有る。今人の天台の修を佛人偏お佛を、けりりの
明ひらお出願。まこととて。佛の法華の即天有る。今人の天台の修を佛人偏お佛を、けりりの
ひと教を。まこととて。佛の法華の即天有る。今人の天台の修を佛人偏お佛を、けりりの

池上大夫の義宗が言の如く我と隨喜湯作せり。然れども今の時勢、勸持品を、後ひの
お承り。我の密お承り。足下にお承り。お承り。佛の法華の即天有る。今人の天台の修を佛人偏お佛を、けりりの
谷お承り。お承り。佛の法華の即天有る。今人の天台の修を佛人偏お佛を、けりりの
本化お承り。お承り。佛の法華の即天有る。今人の天台の修を佛人偏お佛を、けりりの
二十七あり。二月十日の日。父也。日居士。頼お承り。お承り。佛の法華の即天有る。今人の天台の修を佛人偏お佛を、けりりの
祖の跡を。お承り。佛の法華の即天有る。今人の天台の修を佛人偏お佛を、けりりの
將承り。お承り。佛の法華の即天有る。今人の天台の修を佛人偏お佛を、けりりの
地と垂を。お承り。佛の法華の即天有る。今人の天台の修を佛人偏お佛を、けりりの
の止まり。お承り。佛の法華の即天有る。今人の天台の修を佛人偏お佛を、けりりの
て戒め。お承り。佛の法華の即天有る。今人の天台の修を佛人偏お佛を、けりりの
と願。お承り。佛の法華の即天有る。今人の天台の修を佛人偏お佛を、けりりの
もて。お承り。佛の法華の即天有る。今人の天台の修を佛人偏お佛を、けりりの



伊東朝高

日蓮上人



高祖
石磨
遊久

高祖石磨遊久

〇九



逆佐松葉
谷の草薙
焼針小八

日蓮上人傳會卷之三

皆く念誦咒教の久後、此の地に一精舎と建神使、初は徳富山法性寺と云
初て、祖とて出のひ下後の方不杖、更へ高本、多分、教不化、人、多、大、不、教、ひ
崇、教、ま、る、と、他、日、不、信、を、頼、て、宅、の、傍、に、二、竹、菴、と、造、り、て、不、退、ま、る、と、世、朝、書、所、方、の、乳
と、獨、ま、る、と、祖、と、て、威、多、ひ、中、自、言、四、善、薩、の、像、と、彫、り、て、此、地、不、安、置、一、法、華、寺、と
號、ら、し、二、百、日、の、鎌、越、と、開、き、し、今、の、中、山、法、華、經、寺、と、も、あり、ふ、多、八、則、中、山、身、二、世
日、常、上、人、と、稱、し、る、この、時、不、退、つ、て、若、谷、教、信、太、田、兼、明、秋、元、太、弟、宗、と、改、め、て、戒、と
受、く、も、祖、と、て、ふ、多、の、と、り、不、一、言、に、善、薩、及、び、大、乘、并、て、自、刻、と、て、供、入、り、し、鬼、教
の、鬼、子、丹、神、と、刻、し、る、所、不、安、置、せ、り、
今、中、山、形、移、す、と、も、
ま、と、實、徳、品、の、後、相、大、小、二、幅、大、
更、之、の、像、と、畫、く、畫、の、ま、と、妙、と、得、ゆ、ひ、り、り、今、中、山、の、繪、物、と、り、

按、る、不、信、祖、統、紀、二、十、四、不、信、と、進、士、若、春、松、兼、谷、不、止、宿、人、法、教、と、防、も、若、此、人
在、り、せ、六、強、危、り、ふ、と、り、以、法、堂、房、麻、と、彼、る、も、祖、若、密、不、匿、若、春、堅、護、子
取、り、人、三、教、退、去、若、春、若、勇、猛、人、と、之、并、と、爲、今、不、退、の、ま、と、進、士、の、若、春、不、入、と、云、

え、り、ま、る、ま、る、下、下、勝、と、傳、へ、終、登、房、一、人、た、り、ん、この、終、登、房、の、こ、と、い、ま、る、
その、傳、を、考、へ、む、と、犯、年、録、不、し、る、〇、若、春、教、信、の、戒、を、前、果、て、月、礼、と、り、その、子、興
宗、の、山、城、入、居、と、号、は、父、の、志、を、継、ぐ、力、と、も、祖、不、智、ま、と、云、〇、太、田、兼、明、の、友、清、の
と、り、入、深、三、任、頼、政、の、喬、南、の、頼、政、性、多、と、射、る、實、不、う、り、て、丹、及、若、箇、の、社、太、田
城、を、賜、ふ、と、孫、の、故、不、太、田、と、氏、と、は、云、高、本、の、多、分、妻、の、兼、明、の、姉、あり、俱、ふ、る、
祖、不、信、像、一、の、男、不、太、弟、と、似、て、言、祖、不、信、也、
神、河、南、和、末、日、高、と、呼、ぶ、兼、明、老、後、丈、
七、
不、信、像、一、の、男、不、太、弟、と、似、て、言、祖、不、信、也、
神、河、南、和、末、日、高、と、呼、ぶ、兼、明、老、後、丈、
辨、別、若、と、兼、内、と、皆、を、形、不、知、家、を、著、し、係、名、を、以、て、道、號、と、る、は、高、祖
是、と、美、し、と、兼、不、兼、明、上、人、と、稱、し、る、弘、安、六、癸、未、日、月、十六、日、逝、也、
と、云、〇、秋、元、太、弟、兼、衛、の、下、孫、白、井、村、不、信、を、法、華、寺、と、い、て、言、祖、不、信、會
佛、を、兼、て、檀、越、と、る、
兼、兼、不、富、本、の、色、を、あ、り、今、白、井、の、秋、本、寺、也、
益、説、
と、辨、と、和、初、を、云、と、り、て、中、古、孫、て、本、の、字、と、い、と、り、

第十二 大祝兼益神道傳授兼高祖伊東(辰)諱の事

按る所の一條紀年録と大小異之かの書あり弘長元二月三日祖武公因日不ありの書
 田の大祝兼兼益壽の祝益の家のあり祖と不執之林乃の受給と同のあり兼
 いさくをた他門の他とある。その書に師の不凡なる。吾院を所する祖遂不執念ふ
 久のあり。その以書不因田武公於筑那吉田八景の東不あり兼益世の友亦ト都氏大
 織冠の簡之兼益同の兼益紀ふとあり。と見えたり。世間流布の書に
 中不父不父の兼益より日昭(昭)の書等うんとする祖花洛の吉田に到り多由不父
 えさる。紀年録の鏡若らくハ非あり。凡統紀といと兼益ふふの再再ハ修勢不修
 後之益行が拒介の書と兼益上系と有田不到り多入。その事實悞入不似たり
 了祖法念不帰を多人ハ辨開梨日昭先のやく祖兼益不兼益と據へその帰菴と候之入因之
 了祖ら不父と向の難不也懲るやく。移妙法と唱人他宗と被。毒敷裏。逆用紙とあり。
 故不こと不教對の初人勇猛と感。流不飯伏之。降るりの若手あり。一條於基池上宗仲
 工友左と等志と兼益之躬と在而候給せり。と不極樂寺の良叙居候とこと悞むことま

ある。實ハ先頃堂と繕ひこの菴と燒討せり。その信が密計あり。不早くもその祖ハ通れ
 ぬひ云々平根不坐せ。執念のものと。據之。己が權威あり。一條氏重時不執人置とま
 後所とて構へたる重而その以府朝不在てその任重と入る。よ六弟核の理札寺不あり
 良叙が魂と容とるものも。時と候といま。果さば。その子長時ハ執權を。時不捕依
 とく。副帥の職不かり。頗る威權他不執り。良叙とこと。儀情とく。頻り不焼と據へれ
 老父と孫とを祖とす。日六月十二日。更召修東不殿竄を脱入人。祖と繕入日昭日
 朝日興の輩。不末とく。別とて。情と友。更不對以。法共不記所へ。然んこと。不へ。ど。不の。涙
 不ある。流人。不後者と。修とて。此とて。其。恨ひか。了とあり。と。不。能く。かの。三。個。ハ。祖。の。修。不
 推ひ。引。り。傍。修。と。別。と。惜。む。と。祖。の。渠。等。が。定。意。と。威。と。衣。の。袖。と。後。ら。と。一。が。良。あり。と
 宣入を。志。は。と。と。あり。吾。今。飛。あ。ま。し。く。飛。不。庭。せ。れ。遠。放。る。と。是。非。不。及。び。た。の。入
 由。餘。多。た。と。あり。あ。と。と。一條。亦。ハ。時。政。と。祖。と。その。孫。泰。時。不。あり。法。と。定。む。然。も。自。承。の
 式。同。ハ。天。下。不。家。の。傳。令。と。く。後。世。と。と。と。と。然。る。不。其。の。孫。不。背。を。祖。兼。益。と。夜。討

海上山佛現寺と号す。此の禪宗普門といふもの。常日自天子と拜する。一初日滿の中
 小三菩薩の出現せしむ。親教喜し。自の書畫を。年来画不秘あり。今幸時あつてこれ
 持来し。祖小の慈眼とを。高祖拒む。心とく。慈眼とて授けぬ。普門の教
 びて。恭敬禮拜あり。高祖の爲る。二菩薩と換へ。惟ふ。慈眼と傳ふ。と云ふ。不果
 僧の書とて。小の親の世。因東の流人。日蓮小の慈眼と傳ふ。と云ふ。と云ふ。決て清ぬ
 普門心中の怪とて。ひて。年月と返る。不果して。高祖の所へ。取滴のうと。及び。性善の
 こと。思ひ出。快とて。慈眼と傳ふ。と云ふ。と云ふ。の。周あ。と云ふ。や。禪家の普門の
 傍法の。先とて。も。祖傳と。あ。と云ふ。慈眼と。共。普門教びの。あ。と云ふ。
 化里を。一紙小書。長く。法宗の。先。不。と云ふ。と云ふ。と云ふ。
 一輪二尊之像者。余奉侍。金鳥尊。天之朝。日輪光明。中本地尊。影現
 是則日月一體。陰陽一致之根元也。故取筆。謹書寫之一。異僧来曰
 日輪関眼。關東流人。釋子。日蓮云。今茲弘長元年辛酉六月六

日。伊豆國伊東配流下開眼之秘寶藏納永家門之寶物也

弘長元年辛酉七月八日

南禪寺沙門

普門

此の紀事。今彼が。小藏とて。と云ふ
 ま。日輪中二菩薩。現出。親を。普門。自。此。換。高祖。関眼。高祖。在。不。元。を



弘長元年辛酉六月日

日蓮

判在

南禪寺 普門筆 朱印 有之

是より後かの並門に添く同祖の徳を信じて感同審切ありけり。祖の徳を感ずるは、
あまの御尊の徳を感ずるに似たり。祖の徳を感ずるは、あまの御尊の徳を感ずるに似たり。
あまの御尊の徳を感ずるは、あまの御尊の徳を感ずるに似たり。祖の徳を感ずるは、
あまの御尊の徳を感ずるに似たり。祖の徳を感ずるは、あまの御尊の徳を感ずるに似たり。
あまの御尊の徳を感ずるは、あまの御尊の徳を感ずるに似たり。祖の徳を感ずるは、
あまの御尊の徳を感ずるに似たり。祖の徳を感ずるは、あまの御尊の徳を感ずるに似たり。

並門の南禅寺の岡山より大明國所より入る。是れ
按るに並門の各因と号するは初め東福寺あり。宋より入。後宇多天皇弘安元年
小帰朝に正應年中。龜山上皇御影の難あり。この官狀怪多。南朝の
散るに由るは豫の若むきとの退くは因て並門と曰ふ。並門より小帰朝に扶翊
退く。上皇御影の心を宗門に傾け南禅寺の岡山と号する。大明國所と号す
。まことに佛心禅師と号す。

日蓮上人一代圖會卷之二終



111
3
74

